



1

紋別港

スケソウ、ニシン、ホッケ、カレイ、イカ、タコ、鮭、マス、ホタテ、タラバガニ、毛ガニ、ズワイガニなどが水揚げされます。岸壁の長さは2.2kmあって、オホーツク海側としては巨大な港です。外国との貿易の拠点となる重要港湾に指定されていて、ロシアなどから海産物のほか、石炭なども輸入されています。奥に赤と白の灯台が見えます。左が赤で夜には赤いライトが点滅します。右が白で夜には緑のライトが点滅します。灯台の色に関しては国際法で定められていて、世界共通です。この2つの灯台の隙間が港の出入り口となっています。



1

昭和の北洋漁業の拠点

昭和の紋別の経済発展を支えた産業として北洋漁業があげられます。これは大型の底引き船がオホーツク海の遠くへいっておこなう漁で、紋別もその拠点として栄えました。その昔、昭和初期にはソ連(現在のロシア)の陸から12海里(22km)のところまで近寄って漁ができたそうです。主に樺太(サハリン)とカムチャツカの近くです。なぜソ連まで行ったのかと言うと、北海道よりも海産物が豊富で水揚げが多かったからです。しかし、1976年(昭和51年)、ソ連は管理水域を200海里(370km)まで拡大したことと、オイルショックによる燃料費の高騰で採算をとることが難しくなり、北洋漁業は一気に衰退しました。一番多い時で40隻近くあった底引き船も今では4隻のみとなり、北海道近海のみ漁がおこなわれています。



2

紋別場所跡地

紋別港の左側は砂浜で作られた天然の湾になっていて、湾の内側は波が穏やかだったので、江戸時代に天然の漁港として使われたのが紋別場所(紋別港)の始まりです。当時は「トマリ」と呼ばれていました。紋別の名前の由来はアイヌ語の「モベツ(静かな川)」から来ているモベツ川のことです。その河口にアイヌの人々が集落を作っていて、自分たちの住んでいる場所を「モベツ」と呼んでいました。その後、「トマリ」に私たち和人の番屋という漁業基地ができ、モベツのアイヌの人たちは「トマリ」へ集められて労働させられました。その時、「モベツ」という地名も「トマリ」へ引っ越してきて、その後、明治5年に明治政府の開拓使によってカタカナの「モンベツ」と名付けられ、明治8年に今の紋別の漢字が付けられました。



3

紋別市立博物館

昭和の初期の漁業基地「番屋」を再現した展示物の他、紋別を紹介したり、鴻之舞金山を紹介する映像なども紹介されていて、懐かしさとともに楽しめる施設です。



4

紋別公園

歩いていける見晴らしの良い高台で紋別市街地の一部を見渡せます。正面のオホーツク海は冬は流水で覆われて白い氷原となります。展望台は無料。



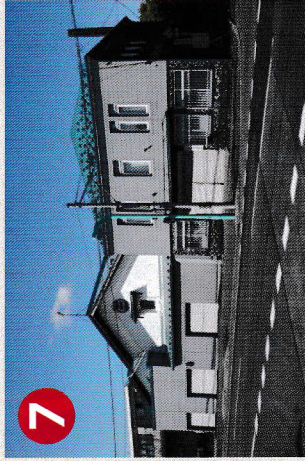
大山

背後にそびえるこの山の正式な名前
は紋別山で334mあります。東京タ
ワーが333mですからはほぼ同じ高さ
です。あそこに東京タワーが立って
るのを想像してみると面白いです。ま
ま。地元の人にはあの山を大山（おおや
ま）と呼んでいます。大山ではヒグマな
どの野生生物も生息しています。



けんか坂

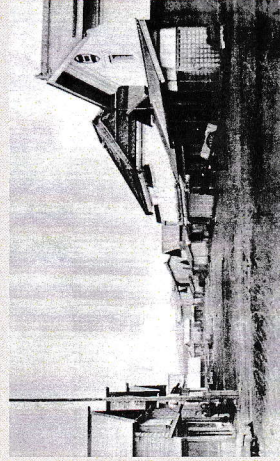
この坂にはその昔料理屋や飲み屋が
並んでいました。当時、定期便の船のは
しけと木材用の船のはしけがあって、
お互いのはしけ労働者どうしでよく
とっくみあいのけんかをしていたと言
われています。



岩倉土蔵

(下写真 は明治時代の様子)

この辺りが紋別の初期、およそ明治
時代の経済中心地でした。当時は都市
と都市を結ぶ道路がなかったため、人
や物の輸送は船で行っていました。漁
業基地である紋別場所を拠点に街がっ
くられました。明治28年の人口は1
083人で、そのうちアイヌの人が9
7人という記録があります。本州出身
としては南部(今の岩手県)、越後(今の
新潟県)、能登(今の石川県)の人が多
かったそうです。この岩倉土蔵は19
03年(明治36年)ころ造られました
た。これを作った岩倉梅吉さんは船の
積み荷の運搬作業をおこなう会社を経
営していました。



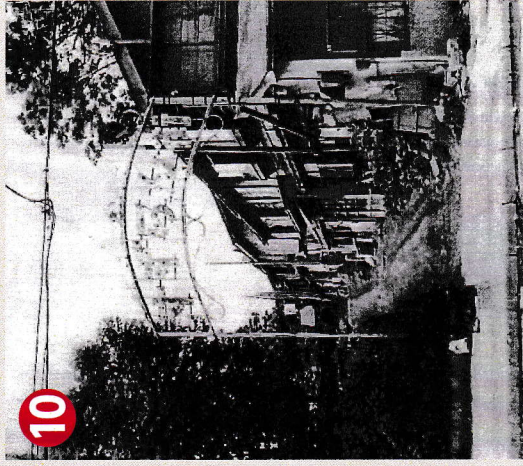
田中呉服店

この建物は1906年(明治39年)に建
てられた田中呉服店です。この建物は紋
別で唯一残されているうだつ(税・卯建)
がついている石倉造りの町屋形式とい
う建築方法です。この方法は本州由来と
いうことです。創設者は田中亀次郎。田
中呉服店は服だけでなく、みそ・醤油づ
くりや雑貨品、農産品を取り扱って北海
道で手広く商売していた老舗でした。



遠藤醸造店

道路の反対側のこの古い建物は19
18年(大正7年)に建てられた遠藤醸
造店です。昔の本州で見られた典型的
な商人が住む家の作りです。化粧垂木
(けしょうたるぎ)による装飾はスキヤ
造りと呼ぶそうです。



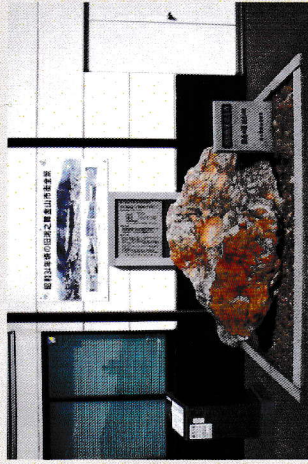
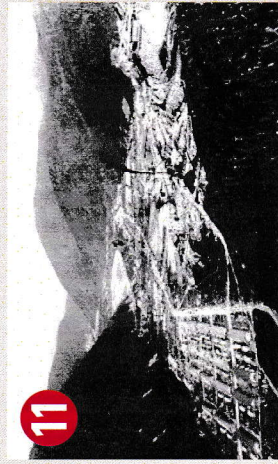
親不孝坂

時代が昭和30年代まで進みます
と、当時この坂には料理屋や酒飲み屋
が軒を並べ、「すすらん街」と呼ばれて
いました。おそらく今みたいに娯楽が
いっぱいなかったので、お店でついで
飲んで払えなくなった人も多かったか
もしれません。人々の中にはこの坂を
親不孝坂と呼ぶこともあったようで
す。その後、この周辺に紋別病院と紋別
市役所が建てられることになり、昭和
39年ころには飲み屋街が店をたたん
で「すすらん街」の賑わいは消えまし
た。今は坂だけが残されています。



旧紋別駅跡地

今現在紋別に鉄道はありませんが、平成元年まで名寄本線というローカル線があり、ここに紋別駅がありました。すなわち、鉄道が主な交通だった時代、ここが紋別の玄関口でした。名寄市と遠軽町を結ぶ名寄本線は1921年(大正10)年に開通しました。当時の地元住民は医療や文化面で孤立感をかかえ、時代に取り残されるのではという不安感を持っていました。鉄道の開通はそれら住民の不安を解消しただけでなく、日用品や食料品や木材の輸送など産業面にも大きく貢献しました。しかし、自動車の普及に伴う鉄道離れにより国鉄は大きな赤字を抱えるようになり、地元の根強い反対があった中、1989年(平成元年)4月30日、「お別れ列車」の運行を最後に名寄本線68年の歴史に幕が下ろされました。



鴻之舞金山記念碑 (上写真は鴻之舞の街並み)

紋別郊外にあった鴻之舞金山は1916年(大正5年)に紋別のホタテ漁師「沖野永蔵」が山の山頂で金鉱石を発見したことからはじめられました。翌年には住友に売却され、鉱脈の採掘や精錬所の建設など本格的な生産が始まりました。1936年(昭和11年)には金の生産高が年産2トンに達し、全国一の金山となりました。当時は、東洋一とも言われました。その後1955年(昭和30年)の年産3トンをピークに金の資源が減少し、1973年(昭和48年)金鉱山は閉山し、56年間の金の歴史に幕が下り、街もなくなりました。



銀色の道記念碑

ザ・ピーナッツやダークダックスが歌った「銀色の道」は鴻之舞金山にゆかりがあります。作曲家の宮川泰氏の父は鴻之舞金山と紋別とを結ぶ鉄道の技術者だったことがあり、宮川氏も小学生時代に鴻之舞に住んだことがありました。当時、鉄道のレールの水たまりに月の光が反射する姿を見て、「これこそ銀色の道だ」と確信したそうです。そして、この「銀色の道」の歌詞を渡されたとき、どことなく懐かしさを覚えたそうです。"遠い遠い遙かな道は冬の嵐が吹いているが谷間の春は花が咲いている"という歌詞は、少年期を過ごした鴻之舞に重なる内容だったそうです。お父様が亡くなって後に紋別を訪れて、自分の望郷の念が重なることに気づき、この曲の原点が鴻之舞にあると確信したそうです。



はまなす通り

かつての親不孝通りの飲み屋街が消滅した後に誕生した紋別の夜の繁華街。昭和時代には北洋漁業やバブル経済の恩恵を受けて大変にぎやかな通りでした。今は店数が減りましたが、昭和の面影を残す紋別を代表する繁華街として現在に至っています。



在りし日の紋別駅写真